

ともに生きる

共生

小学校中学年以上

総合

道徳

社会

人権・国際理解

ヒューマンドキュメンタリー 43分

大きないちょうの木の下で ～いちょう団地に生きる子どもたち～

(2009年放送)

この番組の良さ



多国籍の児童が通う学校で

横浜市立いちょう小学校は、日本人の子供たちだけでなく、いろいろな国籍を持つ子供たちが通う学校です。その人数は、全校児童の6割を占めています。6年1組では、29人中、日本人の子供は8人。8か国の子供たちが同じクラスで学びます。学校では、それぞれの親の出身国の言葉や文化を学校教育に取り入れて、国際理解教育に生かしています(2009年時点)。

保護者の協力の下に

日本に住み、出身国に思いをはせる子供や親は、行事で自分の国の文化を披露して、自国の文化を伝えます。子供たちは、出身国によって違う言葉や文化を、ふだんの授業やいろいろな行事で体験します。

戸惑いと苦悩

自分のルーツと違う国で育つ子供たちの戸惑いと、親の苦悩も紹介されています。

番組活用のポイント

相互理解に生かせる

番組では、出身国の言葉や文化の違いを乗り越えて日本で暮らす子供たちや親の姿が描かれています。日本の文化になじめない子供や親たちも文化の違いを理解し、日本での暮らしが楽しくなるようにする活動が紹介されます。そうした活動は、相互理解を指導するのに適しています。

子供と親の葛藤

- ・中国から転校してきた冬美さんは、おばあさんが中国残留孤児でした。おばあさんは自分の息子の家族を日本に呼び寄せて暮らし始めます。日本で生まれた冬美さんは、中国語が分からないので、中国人の父母や兄弟と日常会話ができませんでした。そこで、小学校2年生から4年間、中国の学校に転校しました。中国語はできるようになりましたが、今度は日本語を忘れてしまいました。
- ・ベトナム国籍のフィン・ティー君の家族は、お父さんは日本語をしゃべることができません。親子の会話も、お父さんがベトナム語で話すとフィン・ティー君は日本語で応えます。毎日食べるものも、お父さんがベトナム料理なのに対して、フィン・ティー君だけ違う料理を食べます。そして、フィン・ティー君は「親がベトナム人であっても、子供もベトナム人だとは限らない」と言い切ります。このような状況の中で、お父さんはフィン・ティー君に家族のルーツを伝えたいと思っています。
- ・この学校で学ぶ、日本人も含めた多国籍の子供たちは、多国籍の生活が当たり前だと受け取っています。彼らにとっては、日常生活の中に、多国籍の友達との生活があるからです。そうした中で、それぞれのルーツを大事にしようとする心が育っています。

こうした子供たちや家族の苦悩は、日本で生まれ育った多くの日本人には分からないことです。こうした点から、国際理解教育などの授業に活用できます。